

# 【保健環境研究センター10月だより】

## ～RSウイルスが流行しています～

### ◇ RSウイルスについて

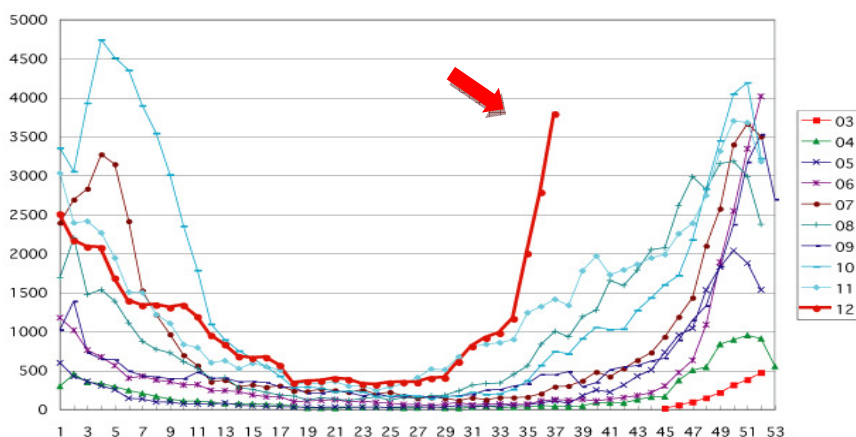
RSウイルスは風邪症状を引き起こすウイルスの一種で、2歳までに乳幼児のほぼ100%が一度は感染するとされています。2～8日の潜伏期間のあと、39℃程度の発熱、鼻水、咳などが数日間続き、細気管支炎となることがあります。

RSウイルスは感染力が非常に強く、1歳未満の乳幼児、特に呼吸器や心臓に先天的な疾患がある場合は重症化しやすく、細気管支炎や肺炎を発症し、緊急入院が必要になることもあります。

### ◇ 全国的に流行が早まっています

RSウイルス感染症の小児科定点医療機関からの報告数は、例年冬期にピークがみられますが、全国的に2011、2012年と2年連続して、7月頃から明らかな増加傾向が見られます(図→)。

2012年の報告数は7/9～7/15(第28週)以降10週連続して増加しており、特に8/20～8/26(第34週)以降は、急激な増加がみられます。



(図)RSウイルス感染症の年別・週別発生状況  
(2003年第45週～2012年第37週)  
(国立感染症研究所IDWR過去10年間との比較グラフより)

### ◇ ウイルスチームでもRSウイルスを検出しています

RSウイルス感染症は病原体サーベイランスの対象疾患ではありませんが、ウイルスチームでは昨年に引き続き、季節外れのRSウイルス感染症の流行を確認するため、9/25までに搬入された検体のうち、上気道炎や下気道炎症状、発熱といったRSウイルスの感染が疑われる29検体について遺伝子検査を実施しました。その結果、4検体からRSウイルスを検出しました。今回調査した検体は、7/2～8/10までに採取されたもので、昨年に引き続き季節外れの流行を確認しました。最も早い人では全国と同様に7月から発症されています。

また、9/24～9/30(第39週)現在、奈良県におけるRSウイルス感染症の定点あたり患者報告数は、感染性胃腸炎に次ぐ第2位となっています。

### ◇ 感染経路を把握し、予防につとめましょう



RSウイルスは、感染者の気道分泌物から咳で生じた飛沫を吸い込み、ウイルスが眼、のど、鼻の粘膜に付着して感染します。有効なワクチンや特効薬はありませんので、自己予防することが重要です。感染していることに自覚のない人が乳幼児や高齢者にうつしていることも考えられるため、よく手を洗い、マスクの着用を心掛けましょう。

(参考) 国立感染症研究所：IDWR 2012年第36号<注目すべき感染症>RSウイルス感染症

<http://www.nih.go.jp/niid/ja/rs-virus-m/rs-virus-idwrc/2662-idwrc-1236.html>

(ウイルスチーム 大浦 記)